

平家物語
十二

1760
10





平家物語第十二

新院崩御事

付賢王得考事

小幡局事

木曾公就事

西園寺内侍事

宗盛可下向關東之由事

入道所當事

因死去事

因莊具事

備歷福井庄司死去事

兵庫崎築地事

又條大納言邦盛死去事

墨淡川合戦事

十郎藏人伊勢進朝事

治承六年七月有政元号養和元年

正月一日わろき日乃中くくろく倉りこれ
とて内裏より東園に去年南都の火災よ
くも胡禰りあり良会江^かりハおこされあり
あことと主上お祈り一閑白山下齋氏公
一人と月いしと氏寺焼失よと延^{えん}め
年家の人こえりそわくくあくそりおこハ
まあるそこもあ乃ちと梅あけく次舞事

ふ奏より世々國極も下りしと籠もふ奏こ
れとく乃りあくそわりく白二百反上れ剛
解ち一人にようら初そあて棟中^{たけなかつ}に後武
さ元くそそみるる胡^こ後とむくくまこれ
佛法主法よりよつこよあるととそは後
又月月初乃僧^{そう}後^ご解^げ意^いして公^{こう}法^{ぽう}を^を修^{しゆ}心
不^ふ識^し没^{ぼつ}收^{しゆ}瑞^{ずい}する倉^{くら}より一人とせくさる
東大寺具^ぐ後^ごとけりあくとく^{とく}堂^{どう}塔^{たつ}塔^{たつ}坊^{ぼう}

み子居燼也なる事おしとけりて記をいへる
とあるいへるれあるいと焼くべきより
乃こるそ山野のゆりりくわと成るじり
ものありそれうへ上縁うへりゆりよりぬれ
南都北志くしなうらうせりてくるよこし
うのよこくもは女をいへるあるへく
沼名のうこわりあるよせんよの沼の公記れ
廻じをこくくま又目下下れとえれは

一わう天台宗れ人んりな捨らへおえハ
は女をとを捨るゆへこり又是れをうふ
より一書印記よたは採くその中状とて
洪卿よいりゆらゆとこあるよと人よ南都とて
つとるゆりゆりよのくちとれあるゆいこ
三瑞宗れ信成実己講中申勸修寺よわりの
信一人と海師とせよとくるる信よ新院
しりよりと御記の記をいへるゆのこり

せきり〜ま〜ちかたのせの申れわりのふと
ほ〜り〜ち〜い〜る〜ちかたの〜い〜い〜
なり〜酒と〜ち〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
ち一院〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
とふ十四日六ちうれ池友と〜い〜い〜い〜
照新院おほせち〜い〜い〜い〜い〜い〜
ち〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
て〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

通親そりちる夜上人十人前駈十人供なはる
と〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
ち〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
た〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
ち〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
ら〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
ち〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
ち〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

よつと世法一々人かみかめてまの
事一子一あるよりまき一実國大納言
此少忠とあへたてまうりくさう一これ
人さ道決あされ一りる一くさあうねる
上とく後の此講乃さうこあるよはあてさう
くうりある大徳とさう記名のことんれり
ふいりある嚴めてはねるまみりさういん
ふとるあ一る芳賢をれ名場に徳のめと
秘

も事みなる君成人乃後法徳とさうせ
う念れ事あてさうわゆるよこま心表
下は勿
れりあう一ゆ一海より性をはうこ
交さ
湯とり一さうわりさうわ
れはし
と
とさうあ
ゆり一り
それ
仲よ
うん
ぬる
新
徳
承安乃
ころ
此
在
位
乃
さ
う
わ
る
さ
り
一
う
六
此
年
十
さ
い
ん
り
り
や
な
る
湯
を
り
一
ゆ
一
久
ん
紅
紫
と
あ
い
湯
を
浴
し
て
水
の
陣

よふ山を流るゝ糸山と名はゆゑに櫛鷄
冠本ぢんと此及らぬうゝをりみらゝるを
ありゝらゝる終日はさゝらんわ事なれどもか
とわさゝるゝとありゝらゝるゝあるゝ新井
分れゝらゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ら吹ゝをうれて流葉の狼藉うりぬゝ乃
中ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
これをとらゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さあつめて風冷ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
酒をわゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
れ花人の事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ありゝらゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
未事やみらゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

里あれ

建礼門院入内れりあえのはり先の御
交沙方ゆれを女居れり一はるひあな
わう久乃おもはるはの事わりと龍旗
よ恐天もる事わりとあなをな死河ら
ま事してはるくあくあなをな死河ら
こ乃事らんふあのみこえり一え 尚母御
詠云生女勿悲酸生男勿悲歎又曰男不封

女作妃あし戸御さこえりもころ國母院
ともいれねんといみりりるさいりみま
のちるところあなれりちりよは又あなをな
事な一はるくあなをな一はるくあなを
ころ世のあいらあなをな一あなをな
さきは一はるくあなをな一あなをな
りあなをな一あなをな一あなをな
ころあなをな一あなをな一あなをな

あるよしあはゆれるはうらなせなりき
まよよわれよこしきありし事なは
母後建春門院おられさ場始りしとさあ
なもはわたりたりていさうはなれ
はうまもるあひそ後初とてよりこと
と御あられ御あまうりしとを御あま
ぬくまもろあけふあり一日とて月よ
ナうとよこし月よあそとるよよぬれ

除^除眼^眼ある事なすこの目あそとては除
脹わり斗るよまうりあせ始る人な一也
はらあめは事なあそとれもあまな
そは事な中海ううりはは始りあま
とあまあまのいさなはははなまあ
るをせたりしとあはれあめあま
はあまあまのいさなはははなまあ
通初ははりし腕よは衣りしあまはあ

て戸の端よりとれどもおぼしき御書に
まゝに候へりしに御書に御書に
あるは候へりしに御書に御書に
をきえしに御書に御書に
なほおぼしき御書に御書に
を候へりしに御書に御書に
よしあはれしに御書に御書に
とくしに御書に御書に

御書に御書に御書に御書に
られしに御書に御書に御書に
しに御書に御書に御書に
乃に御書に御書に御書に
あはれしに御書に御書に御書に
さしに御書に御書に御書に
くしに御書に御書に御書に
そのしに御書に御書に御書に

元治二年は家前の出所入所うまのめ
事なりうりあるよう思ふは諸人唱曉
警明主之職程よりうりうり何と
いへば五業は艱難とすくわりの
海にさゆるお書^兼れと氣にたえり
くれんうりうりけいんまがら
聖帝乃四海の民いふよと
夜とぬる路始りん事なり
うりうりうりうりうり

清乃うりうりぬ事とたあえなり
うりうりうりうりうりうり
とくは乃・念あうりうり
ハなふとととととととととととと
うりうりうりうりうりうり
れとのやゆたうりうり
うりうりうりうりうり
とあゆむとととととととととと

それ比乃無汚射此功ハ女百也一とありん
二也と度主端よかふあをさうて日母乃宮下と
あいまりそれとも回ると神也といは良夫教
辰の次はありしりしとすしつるうとてさうせう
れうりなすこえ主上あはせわりのをを親珠
と端せも民れられへとハあふあふととあふ
一あせとも穀すよあよんはのゆさうてお
はるらんみよりの事あらんとハあひるんく

やをみやをやといさうとあふくありしりせ
二のよ来と云中前乃航ありあかんよ一と
航乃ましりりるあひるにわをいせてよとの
男さうしなふへ一ときいしりあせとも明玉有
私人以金石珠玉无私人以寢職事業をとも
われんあふらうりあふへは世一り板石
せん事はりりわりして清正良美う終は神
りてるとる一は新ハ世日のは終法よすてる

事あることとあるをわかれし信のこころに
るよあより使ひしるる大法師のあかし
うる信あることと使ひしるる力と
あましるる信は成百のふと及へり
とて信もあましるるふと及へり
京れ場よりしてちりあひのあましるる
よあせしりてそのふとせし信をり
る心のうらいつるりなりらん又金田村を母え

とるふ節あはれと市況和あはれ新巻とふ筆葉
ゆあわり多の信のよよりあひて其をさうりく
累次樂也といふ留あはれとあはれとあはれ
二人よりあひてこころはうららぬれはあは
る事公私よつあはれとあはれとあはれ
母国巻よあはれといふ事ありて母えとあはれ
よまといふるあはれはあはれとあはれとあはれ
いよあはれといふるあはれとあはれとあはれ

給りのされともみおのりいひていふれん
わうぬ無うはれれていふくわうりーと
おとんとももひなれはなれんお前よ
おぬらうそせいせんともあわれるおのれ
字又わさうぬは事よそおぬ小何後園表よ
うせ給をいやす大改入道まうぬく小何り
おるひもまうくわくおぬいせんのおぬ
も入るもいなり二人ハ無河一まうひて

死ぬーとまう二人のむこまうんうぬら
ひやうちいひぬりまう一うはわぬぬぬぬ
乃こらぬまうぬと光甘まうぬぬぬぬぬ
まうぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
まは何織乃おぬれともとりせよ入うぬ
乃お院まうぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬハおぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
お院まうぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

さて百夜乃如法をうりともめ内泊う縁あゆ
くしけ文衣廿夜正次う人うあ人泣まれ
おもたり四面れ流わうーと入てあ月日
かよりとえん屋うそまうせくあ禁終乃正
こまへー一色くそりつひはるるい何れい
と名ーいよああーあされとこ小河夜乃
ゆえとあうあとうけせ終ふあーと地
ようひとこうはや天下乃あうーあーと

桑の葉はとらういばの段を道は地あ
事とあいりよよゆせううんこさうさ世の
たもひあてとわああわはあなる人ー
人えりあういの流ああこ十せんのか
うーつうくもああのせんうあ人あうひ
あーあとと流ひーちたりわうはな
小河よあううんいそああーああああ
ああゆくまはああうすみわうりあーか

あく者と謀一をじしけつ新輝乃世守との
うくのえんあり一ちいしあるをまう一とふは後
世れいこおほ一ち一て一人もゆとちたたるよ
夜ちんうよあひいこちのくあうとふあう
さのそ人危るとはうのわりせれいさる
さして後上着人ゆとまのりつちあう
あしは定わりのあしと入曲とまのりつちあう
あちくあしとあああいしをたゆわりのせ

は字のしわりのせれいさるちんまのりつちあう
よあ何のゆえいとのてまのりつちあう
わりせれいあうと一ちのあはいさる
あしはえんのあしと入曲とまのりつちあう
ちくあうまのあしとあしとあしとあしと
あしとあしとあしとあしとあしとあしと
あしとあしとあしとあしとあしとあしと
あしとあしとあしとあしとあしとあしと
あしとあしとあしとあしとあしとあしと

ふん雲乃をそ海のはらへまてもつらのみ
いせぬーとまれん神あぢりい
和されこありとやまうそとちよら
わりまれん屋をばうりおんまうり
とあまよりていふよとをばつちまた
とつる里まうれは馬をばくせん
と内野とまらふよに和されあ
と記よのほーよら屋まひこみらめ

人よりむらたつておていそに和さのこあり
戸小指乃つちのれは宿まへんまはら
人真よふくそちまうそこらふのこあり
とそはつぬるよあうらのそに和され
ありとらふのこらふそ人あなくと
たりきあつちおとこありと和さ
とらふのこはらぬよ杖のあはれは
よあまらふよあまらふ

そひくはほそあしとふくふくふくふくふくふく
こまをぶ久とじうねんふくふくふくふく
うる葉もあらしむに花さぬみあり
あはきつひあそむあらしむとこそふくふく
あまの世そらそらふくふくふくふく
乃は馬とほく世よせん一とふくふくふく
祢うそふくふくふくふくふくふくふく
さよそふくふくふくふくふくふくふく
さよそふくふくふくふくふくふくふく

正八俵交日月星宿をんらう地神のさう
さぬ御らん世後をさうしてあくあくあ
いりうは遠勅れあのよあのせんせさ
あまの世そらそらふくふくふくふく
大強とさうり弱よりせてけ程は海とや
あまの人の法瑞をせんよまの強るあま
あまの世そらそらふくふくふくふく
あまの世そらそらふくふくふくふく

い松の一むらわりのるるこ秋きつりれつえん
よりはるおとけうーさこのるることめりりふ
あへあれえらひの嵐つゆのせがらるる人
の想えれ縁うらうらうーあかりあーるるの
ゆーや小河夜こそあせらる上ひとせゆしく
しとまーしとのとめりひさここせらるる
あへあく衣うさ大流のこさけはらよと松垣
乃ゆあれるるはさこひありのたけらるる

ういありのたわりのあしなるらんあひくさる
あひのむあらうふいふとえいこのあひのあむ
せとらうりあるるわらあへくこくーあ
因襲より乃はつこあ夜上着人さあひの
りつてん小何乃はつあひのさよけきつあは
ふいこーりしてはあるるあふーせんし
あへあひのあはしなるるこあひのあひの
らせはるるあひのあひのあひのあひの

とひうせ流り流あくお想又懸しうしんくと
ありうしく元をましくお流るあいにそれふ
つるしくろ縁ゆりりてゆつるいよせんり
尋食きり件乃あつた男とあふ楽あつた
くハ小河流りゆのむらむら事ハあつりりせ
乃あそりうーさふ我よとくおしちしてせよあ
流しそわとれあさくるまよじりんよあせよ
ゆわやせま^{あり}れん花人秋のゆよ^車運^りよー

あや小河れつ不祿肉素へ入りせりあは
まよたのああひんりこもせ流く人よあさ
流あへうーあさいまよひくさのひくあはれ
ありそれよりころあひよはあつたれと後り
あつせ流小周祿まは元湯流といし賢仁
月とみく月見の天長よあせるいよあたる
祿ハ中とまきくうんまよいるあうーあひしと
ありあつりあれえ人にれあそりうーさあああ

何れにても何れにても福よ大改入つては
ていりまの物くちうりませりりゆはれ
つゆの乃おしる事よ何れにても
みよしういよもてはがれちあひい
うしてんこくれん海いよまのめりか
るいせいつのちりる下ま一の戻人よ
あひいよまあつてあひいよあひい
えんみよはつてあひいよあひい

いまのちんよあひいよあひいよ
山河及日月いよあひいよあひいよ
まの波なうらいつてあひいよあひいよ
よ海なうらいつてあひいよあひいよ
あひいよあひいよあひいよあひいよ
あひいよあひいよあひいよあひいよ
あひいよあひいよあひいよあひいよ
あひいよあひいよあひいよあひいよ
あひいよあひいよあひいよあひいよ

戸にせ給くろり作れわのむるに母をいふこ
らよつせうそまろせぬ清くはあそくくハ
延教天曆れけしおまこらうんまあういそお
まひ清くよくは記うり活ねるるゆへて歌
男の激運乃つこわろ乃みよあもも團のま
へい民のをやうのつこまらけしそまあうりいそあ
り活るる同世ハ成院乃を清治よおれまろせ給
うりうんはわりのあ舉賢義孝先小の後小の

也云るしとこんりうましく人れ先才百のうり
ようせうりーな父一條攝政伴母長こ
乃あこのおまひなと成りうりて及二條関白
師貫公よおられ給東後乃攝政志かりんま
くせしよありうりてまろく初孫の成明り
後まろ世之を想英造於是後子之想恨而更
恨英造於少先親之恨後老少不足猶速前
故相をよあましくまこりうりあじこしそあこ

はるこのけりしはるみさこと記あんと永可
元年七月一日一沙予二條乃院とせしは
治よま才二乃沙予高念文治承四年六月一日
ちうせしはるね院世後生とあつこみみそそ
ゆつり治へ百新院とくちうははるたせはる
いしはるいしはるいしはるいしはるいしはる
あるはるいしはるいしはるいしはるいしはる
人石のちういしはるいしはるいしはるいしはる

うみみはるいしはるいしはるいしはるいしはる
治果とせしはるいしはるいしはるいしはる
春門院もあえ二年七月七日秋風あつり
してあまのあまいしはるいしはるいしはる
くあまいしはるいしはるいしはるいしはる
よまはるいしはるいしはるいしはるいしはる
あまいしはるいしはるいしはるいしはる
ハはるいしはるいしはるいしはるいしはる

為宗は寛治とがうひあくとに成の帝と
 おりんみありの徳なりいられたらんまの政
 務も危やましく一月とあるらんひられ
 けられぬと危しといふありまらう新院乃
 り事入らうといふ事い内和よつてくが
 しりくきの事ゆませと入道相國こそ
 わりふゆとほしくいふていふはあくる
 ちひするしむとあそりくもやまの徳た

百回も改入しうやとじとああいのりう
 乃内治るるよとせりうりぬまをめん
 い後治く上らうあなわまよゆいせ公卿
 上人おぬも徳をして女御の徳式なり
 危うくとありのるありのまらよとま
 へあし何事とすといふいふしとあ
 ちかいらうこのゆんよかれを治く
 流るる百回よとせあまよと流るる

物國へわらうとて業取深乃わらわや乃元
とされよわらうとてのまらいはわらけり馬よ
乃りこもんきんを鹿よしらりてりてり
のを海よそりりてよありよりるこりり
いほこのらあへほいひりかろいあそり
てとせれ國小樓とるふ取へあつたれてこ
わりのむらとやを忠友のあつたれつるはり
わらなかりあり

とあり乃國母景初景木曾山とるふわりのあ
系もんきんあつてりてりてり希先生を景
り次男とてのらんやりてりてりてり
國中乃景初を侍事とる人よあつてり
りてりてりてりてりてりてりてり
國五胡郡よきよちりてりてりてり
之を澄き良君よりてりてりてり
わらひわらひてりてりてりてり

喜子もみこひもれんあれあいありたるゆかん
れどもいもみこひもれんあれあいありたるゆかん
ちり中よりあつなむこひもれんあれあいありたるゆかん
はくそのこひもれんあれあいありたるゆかん
まいおあつなむこひもれんあれあいありたるゆかん
うーけあつなむこひもれんあれあいありたるゆかん
いらせ成老治る程よ武よりこのゆかんあつなむ
ら矢乃みらんよとくれあつなむこひもれんあれあいありたるゆかん

喜子もみこひもれんあれあいありたるゆかん
てあつなむこひもれんあれあいありたるゆかん
まいおあつなむこひもれんあれあいありたるゆかん
生かすもみこひもれんあれあいありたるゆかん
あつなむこひもれんあれあいありたるゆかん
うりあつなむこひもれんあれあいありたるゆかん
そりたるすこひもれんあれあいありたるゆかん
あつなむこひもれんあれあいありたるゆかん

たみはうーたきさの物矢とーりよまいるるのい
そつと事なきーあらくこらふのうき乃ち世を元
ゆふふ天れ授るるついでありのゆりこりなと
うく人のそなきーあそふありの海をのりて
さる人ぶ人のむとあふかりのわもせんよあは
ゆとくせ下なるハいこもくあつゝありあるとん
あのみんちやいりあははを朝すへーやまか
ほえとあれさうりなる母あへるありとあはれ

せんさんおとく先祖乃教平家をうり
てあはらうーやとくあこんきをうり
あそこのあちよーとりよのよはにれがとあ
くハあういなきあつゝりたしそいあかうーあり
さあくせんうりこらあや下して平家なうり
いんああよ志のあくあへるあり人よまはれ
てふああういあうういあれとあいあれさ
うりあられとあきをあけさうりある義

かたりんともきえり母をさかんもるはりし
をのこくわけるこられともおとひるその
乃らたせ乃こみえとをされて尚國れ大
根井山を滋野孝親也いふものよりあを
授孝親あまこけぬてりそな一わつ死
るの程は國中舉てつそは曹司といふ
父多胡先生義賢よりそと上野國常士是利
り一族の下みかきそは後付はありさる程は

伊豆國流人兵衛流むりんとかこて東八
ヶ國と後流もるよりこみえられよりあ
きそのしけりしはくわいりて志あは國を
押領もか乃前八志あもの國よりりて北
乃すこみ乃あまうひあれも物といふ
もとよりしそと口そへいあれ人こは
東海道も志流流よりりそれぬ東山道も
又やこはあまこけぬこつりしそやあ

るあまのまことて平家れさあついと何事り
わろく哉故國うた城を帝資長兄才を
爰彼れ者也まそよひなり信徳國れはいもの
をうつふとも十なり一あとかふ色うとも爰
といげちりていそまつのみんせといわれと
と東國れ背へふともやうきなるふふふうか
くれんあまのまこと何事りあまのまことあ
たなる

か八月末あまのまこと信徳國まてせあなるは
か乃本國代へやじまていそまつのみんせ
爰あまのまこと六はうきしと記あへり記はうら
へる屋うよ物とんひああもふへかう
とらしまよふよきと記をら海にちあかん
也とくれハ系中さハとてこといふとん
そと上下海へいあへり爰國より上あまのま
乃帝あまのまことのまことあまのまこと

し従よ人乃家より一里入食ねとらんい
よりくれえ一人とてわうわあ

廿九日右大納宗威卿あふみの國の惣意よ
ふせくも天年三年乃剛とそこあえしや
花人といふらんみのま蒲倉といふとあ
よそあもりるるをたにいけれ征夷大納
うんた兵衛清和威卿仲文亮通盛朝臣
少好清卿さけよあのみこのりはあといよハ

尾張守貞康浮城守兼隈以下二あふれあ
池よりてうへ乃山よりあてんあらうは
隈もろくおいたあえれくあまは仲原
取よ千余騎の隈とてそあもりのるそ
あえし平家をい義徳尾張二々國乃西流
山本柏本錦右利流く又一流并流てなれ
えへいあれ隈又千騎よちりて尾張國平
何といふ所ははくともそあえし二月七日大

以下遊々として書給した不動明王書は
うーうーと俯つる息より一室下せる兵乱
乃出たりとそよみ入る一法もれは清経法社
法奉警使大法親法乃あると一りあくかこま
られきしとそよみ流る一源氏公も流るり
廿あ乃りるあふとそよつるはるく一とま
わらんもるそよこく入るまあなり神はひい
うけ給ふとといふ事ありあまの公あらん

はの事なれも懺悔すれはうそあるは
まのあるまひいあまのありはるしやりの
いそ僧侶も神といひいそとそあるか
一らそそありあを履みある九月じう
ち義基法師の首并子息石川列友代義
といあよりあそそあんいしとそあ河原
御士れより清取くわうへそこそ人のま
よあけこそとそ林獄せるる足あ

とさしとしましよるは衢よさうまんとさくお
元々一線園北威賊首大沙とささるる
たれなり康和二年七月十八日始河天皇
崩後同二年正月九日射守源義親
の首とまこされ一割とそきあえ一あ
義基ハ故澄奥と義友総と所兵衛尉義母
子河内国石河郡住人なり兵衛依持初
同意のわいしとあちうせしと殺しそきこえ

十二日宇流文大官司公通脚あくカいカいカいカ
むの八九国住人菊池次郎高直原田河内
大友権益緒方三郎伊能同持経續松浦
憲とらとあちうせしと殺しそきこえ
うろ大亭前乃下知よとささるる事なり
とんこハいふ事とささるる事なりとあ
とありあまれむほん乃らうりともとあ
西國ハ手取たされんや乃らせく 官戦

せよ幾んところそのみこれ八景年將つ天
交純友のこよよあぬよ乱弟死せがこころよ
わひあつりそく大にけりあねへ重し肥後守
自然うちあむハむつてゆきてそゆねんいそ
うと危はりうさみ子はそゆふよゆねへふ
東国八国とん君へ海をせすいせ一為國
ハのトよあやへ一自然あつんそゆねん
ゆへ一とまのむ一あよそゆねん一七日進ハ

美濃五國れ凶流あう屋城七景城河とそ
武士乃よりせんかいつ一清たて大流そこ
う一知獄つよあつこの月午母ハり伊子國
よりあ脚あつとあむハ為國ちう人河井
介通法去年冬よりむりんとあふ一
て為國の道前道後れゆひある言並城
ようそあつりたりるを海中國住人治實
入さう知寐あつてんそゆねんの中も

より十日せうれ兵船をそり入て道法を
せし初初る九日経うへんされとも勝負
ともせし時と愛ぬ寐の獨活が七郎侍を
せし初初るの城内ははめ入てうへんをある
とよりたいうとつりせんを力を起しあは
とより子道法を起しとあはれとくし
乃らとよりわをあはせぬうりあう也
て活實七郎一むうんうり侍ととくし

たわうへんあれともあなふうりあはうた
よりなりとれえいけとくしとく城内と
二乗られかといわよわしとつりくるあとい
にとりなぬと道法を起しとくしとく
みらつとつりふとのあはうりとくしとく
とくしとくしとくしとくしとくしとくし
とくしとくしとくしとくしとくしとくし
かりとくしとくしとくしとくしとくしとくし

うらひある一り通夜り居まをうらりたり
一人にたりてうらひあると御寐も度乃
申よそりあをくみらほひのあひひいよ
るあ一ま御寐役ををくくはる六城河よ
もいあひのゆらん又いけそりそりうく
ら矢り付くうらひは勝負とらりをもんぶ
ふーやうりみらあひあひあひあひあひあひ
とらを従乃あくらんをいけいあひあひあひ

せんうきうりすていなる事なりあひあひ
らつらひのみるとらりよと御寐も御寐
くむとる役を御くあひあひあひあひ
小糸と御寐をあひあひあひあひあひ
うみらつらひあひあひあひあひあひ
あひあひ事は御の法也あひあひあひ
いこのあひあひあひあひあひあひ
とあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひさるやりの事として海路ならぬとて
そのらにせよとて入るやの事ひかちり
これと細路あしをさしてその事の
縁のこころはふ業にふまへんといふ
と後れらあらざりてせむはむと
はくり行はせりて一毎やとせむれ
みんもしてさるる事あらはなり
大ゆらんは世今みらぬようはむとせむ

みらのふはあらはなりわだのくまを
と治田郷は元いふりてみらぬ
書子も雲傍宗茂といふ治田の事
爰乃は世にあらはなり
いふ事いふせんは世にあらはなり
ていふ事いふせんは世にあらはなり
はのわらへる事とていふ事いふせん
うんの事いふせんは世にあらはなり

ナ七日前右大おむのりはなほさるはまゝに
らしりはのりしはなほさるはまゝに
をいふはなほさるはまゝに
はらんせむる大おむのりはなほさるはまゝに
やわげはなほさるはまゝに
君のはなほさるはまゝに
をうえしとた教とはいぬらなほさるはまゝに
そよよ君はなほさるはまゝに

まゆそのりる事ハ何事と天下れは
ふしりよのりるはなほさるはまゝに
よしなれなれはなほさるはまゝに
あまのりるはなほさるはまゝに
るわしはなほさるはまゝに
たのりるはなほさるはまゝに
せんはなほさるはまゝに
はんはなほさるはまゝに

あかきあまをとおぼせられもしはし祿
ふりてよとれまゐるハいふあくハおぼせ入
ううと親あううとあそろうしこのあそひあ
事とあくもころと思のほも一記わしうう又
と思のくうとあくしせほよりとてほとて
ゆみんもあきあしちほとくうりあねあ
あありしとせられあしとてはしとてし
あそとてあしとてあねせられくほとて
うをそせほくあそとせられは宗盛
もろも一記わうりては前をうてしあり
あそとあ人いさああいあひるハあそと
世の中れそろくあひいさうとてあそと
てまうりてあくちなりん一わあ事とあろあ
天下ハあまれいといそし何とこあ
らんといわられる

廿七日前右大納宗盛被下詔と卒く関

人よそより一もあつてはなかりあつてはなかり
をみよのほつふよりのくまれはなかりあつて
まゝをみよのほつふよりのくまれはなかりあつて
いふのもあつてはなかりあつてはなかりあつて
はなかりあつてはなかりあつてはなかりあつて
とて屏風を巻くそつてはなかりあつてはなかり
あつてはなかりあつてはなかりあつてはなかり
てそつてはなかりあつてはなかりあつてはなかり

はなかりあつてはなかりあつてはなかりあつて
みよのほつふよりのくまれはなかりあつて
はなかりあつてはなかりあつてはなかりあつて
まゝをみよのほつふよりのくまれはなかりあつて
はなかりあつてはなかりあつてはなかりあつて
とて屏風を巻くそつてはなかりあつてはなかり
あつてはなかりあつてはなかりあつてはなかり
てそつてはなかりあつてはなかりあつてはなかり

一とさるるして佛位後書れしよあよ
ふるうすうとそゆいんふ給ひるる人およ
きうしうそほひうらあこりてきう給へり
いとほみうくそあゆし一信明の御道
海う平とよとひくくいりきあれとこあら
こちうしこの目のくれやまよ入うう病はあふ
せうまこくたきういんまひきいんの子平院
の水とそりうていし一れあはよ入く入ぬ

うのあうよ入く病あはしとまこの水よ
いんあうりうはれあひとひとあはれあはれ
あまこしとまきいせうり病あはらと病あ
くれハせあくれあまよいしとあまのあま
あしとあこのあよゆしとひとあ病あは
ともあまのあまのあはとあ病あまらあま
あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまぐいづく思はずし一乃大からん 聖武天皇
乃はるらん金綱十六丈の初る之危なる所
危記こそまづりうるむらんの眞符乃れ
こ記よふて大政入るるその思んこそ
しまわうの火のうる海と将来ありとも
こそち危みるも身れ毛つらそおそり
あといふえりなりわいもいふりひてか
危こそあのやこたあふそこそんまろく無

間大城乃そこよい思んもる石人あるゆは
無といふもり一やこころなる無間らこく
のやこせとゆとあといをれえ後さありの
いふいとい一して初やあせうるそおそり
あとおろるありのあ危この後みへりなる
よの病つこく二七日といふよ記りなり
懐徳園後并衣月次御大文信方也いあ
あんよのいらそそそ初へりて二七日といふ

にやむる身とせしむるまうつて死よめる
しそ怖れぬ月廿六日念院に事起る
又りしは一月と居るそ又この事あ
る世の無常いふふうしぬ事うねはま
あられあり七日六ううそ焼わけて骨を
田実は眼くらひよけて始むるそ恐るりて
わらわりのそそその秋六はれぬまふ
わらりて二子一人をうく舞踊者のあり

ありのましや水よふを危しとせらりて
かめまこしり危くそやしぬりそん
死ひなんそ志多りたうそれんそそ
と諒園よあり怒そのはちうしんのうらよ大
改入うう候所とぬそもあひひふそ
て火葬とるりさいちうようそ
いふあし人唐志とそわそそ天物れ
よそそわらんあそあしひるはよは

よのれは染糸乃うまひい二人 東乃はり後
人とあつちとけりともりと志るは道は海よ志
元くまいあり 歌中あ司盛後は不願な来
の耐基宗よあひうろのくれはは不約二人
をうろくともくれハの二人は中さうを
かつちとく石大ののりいそまうりうの事
乃三といとろの程さくれあひうりよ
このおまこまてふつるよつりよすあふつる

かまよにとふ物ろひれ 氣出ぬさな
まひとつるなりともくれハさうよとせ
よあつちとくともくれハさうよとせ
えひろひいハいあうらさうともあひま
天物乃は地よりるもくそ人あひま
真福寺れ角一言主明神そて創らあり
かの社のまへよとある本穂子乃本ありか
の焼亡れおの本乃うらよ入くやああり

ちりひるまゝに人あつたふゆに人あつた
なほちりひるまゝに人あつたふゆに人あつた
ふと人あつたふゆに人あつたふゆに人あつた
うと人あつたふゆに人あつたふゆに人あつた
去六日は風をぬく人の姿乃屋のふゆに人あつた
ふゆに人あつたふゆに人あつたふゆに人あつた
乃と人あつたふゆに人あつたふゆに人あつた
あふゆに人あつたふゆに人あつたふゆに人あつた

八條殿に若きうと人あつたふゆに人あつた
は京中へ地をうらむ屋に人あつたふゆに人あつた
あつたふゆに人あつたふゆに人あつたふゆに人あつた
んゆに人あつたふゆに人あつたふゆに人あつた
あつたふゆに人あつたふゆに人あつたふゆに人あつた
天物もあつたふゆに人あつたふゆに人あつた
ふゆに人あつたふゆに人あつたふゆに人あつた
ふゆに人あつたふゆに人あつたふゆに人あつた

しるあよまほくれ怪異あるありまよしつら
つ不のじやよほそ難れつりせるむさうれ
じま乃尾よ福せすそふくみまうん
うりあり今人あまいつけくおひるなま
ううるの尾よ一秋れらちよ次ふいそ
うじ事くもとくわりううくそすー入
ううかともろそそ陰陽師七人ようあま
難道くれんをろくたひいせうそしるふ

れよそそ海くれはをんそとそそそ
甲そのるそは陰陽師参親そ始りるう
る乃初つひみらりりれん君そんそ月
そそやせるさうみの國ちう人大座之師
京親り東八ヶ國寺一乃君るありそそ
てら甲く馬ありのじ事じうそそ
そいあそぬりそあそそそあそそ
じう天智天皇元年^{乙丑}四月よそそそ

乃尾よ福とすすをう事ありとのれと
かともさかほりてはト蓋をくおくれ
りれりりよは慎あさく決中せりあめは
代りお^{ちん}せまといさゆありく世乃なりと
つらあまそそりちいを程もなきてまま
崩れありよりのとやこりあつまよる
うさいおほくそあのも
ゆくりりれつひ乃はあそを付まするつあ

うらよらんそくそあつまあひく程つるま
あふの松乃片母く程よれより入るの
りつるよれあま少りのあふ天物あま
まりりては福八田あまかとのとあま
甲入くさうぬや一記あはるりあま
兵庫鶴はさりりむるのこり入るうさ
の尾まりのありのあまはうさそくれま
運流一せりさくやうあま人はあまあけ

あうりしを次乃う風よらうあうり
次れそ一石乃あうりし一石の
てあゆまういそらうあうりし
たりしうしそしをうあうりし
これ石乃あうりしあうりし
あうりしあうりしあうりし
國あうりしあうりしあうりし
あうりしあうりしあうりし

あうりし十の石あうりしあうりし
一あうりしあうりしあうりし
あうりしあうりしあうりし
下あうりしあうりしあうりし
あうりしあうりしあうりし
あうりしあうりしあうりし
あうりしあうりしあうりし
あうりしあうりしあうりし
あうりしあうりしあうりし

まぐは風よきこせしけくかあへくを
あくありよりのあひくねくははいつあ
うんよりのあんとくうはくははいつあ
強れぬゆいこくかたれとあらあ人
みかよとんひりてははいつあ
船もさるるしあまもあま日月を夜は
うりあいつくうてさうういれ船を渡さる
いとこくう月あはるものちれは名

あはむらたりたういあまがらあまもん
えさりのあまあまもいあまもん
あまらあまもいあまもいあまもん
四国とんせははははははははははは
二三人あまもいあまもいあまもい
とまあとういあまもいあまもい
あうらまは船中浪上れあまもいあまもい
あまもいあまもいあまもいあまもい

體をて朗詠をもちていふさあしひかりを
うら悠政とふれゆとていふあつひん
ハヤとふれはとひふこ乃母は古乃
亭の鬼鳥れ事とていふね國司の下
申物のそこといふ元わこ人下らうのそと
てそとていつ後ハもこととて遠やとて
ハちうちいあひちりことハ展と乃大
まよそとていふねく同中獨回半親とて

まよとていふへつあを有流りぬ希代の歌
たりとていふれをいふや太人の事かあの人
のをいふりやをいふこといふつらみは
をい何院は子とていふのゆいあの人
とていふとん中御とていふ業人とていふ
あまは沙中^サあまは中御あまはとていふ
あつと上いあ人のいふとていふ事わりあ
わらあつとていふ及とあはとていふと

わりのたれさへてむりなむをうしおんくさく
中にあはれしとくあるあはれんらんもたんとあそ
ましのいふとありのるよ上はうらむとあ
ぬくこのあうか一箇とさうりむのうらりの
あんとあま中さうりるくそあうしとれさ
らんとあむせわりのく列れ物あうりたれは
そのあそあうりさうりつとそあうりつとあ
これをあうしとく人トあむのあそ人あむのあむ

金兒よあかあまいよまははにあらあむなる
へあこのあよよとれあんよあむるあむなる
次希代乃うんほくありいよと先世れ事あ
とそあむる上はあむりしあむるあむなるあ
奇とあむりしあむれいそあむりしあむなる
あむるあむるあむりしあむるあむなるあ
あむるあむるあむりしあむるあむなるあ
あむるあむるあむりしあむるあむなるあ
あむるあむるあむりしあむるあむなるあ

人乃中多れは法蓮之記談公よかきし
とのとと早んのかんも治わりあるや院
もきうつわいふりもるや海よよ玉瀬
てをうてふれはよ一天に海とふかみら
乃ららよきく若きともやうてえまの院
ともいまわら道きうておたれと愛記
まきくと法なる院んむておる道也
わりの天智天皇れは母経法へる女御

と大織冠よ獻平法やとてこの世所ん
うらん子女はあらん朕うのよせんなんあ
ははる中宅もをりて作道あるに男子
をうみ法へりやういくとてそて大織冠の
子とて淡海公よははあふ友原真今もき
乃らよはお家して定惠山也号多々義掌
建立してすみ法いあらう求法れとあり
入店とく汝初乃後入藏定惠和尚と

これなり

因六日宗盛卿院奏せられ入道院
薨ゆ及天下の涉政勢いしに
院に及上
之位中ねしものを大ねして
之を國へ入石次とて
之を國へ入石次とて

兵部院初以下東國小國に賦役と追討
之を國へ入石次とて
之を國へ入石次とて

在奉作傳件於初去永曆九年望
河巨國澳梅身之遺永可從朝豪之
倭或侵棄土民之賦東海東山
倭或侵棄土民之賦東海東山

浮突伊勢飛浮出羽陸奥之外皆從去勸誘
之朝悉隨波布畏之中曰茲差遣在軍殊令
防禦之處出江表濃兩國之殺者即敗績尾
張卷河心東之賊尚以因杯源氏為皆悉可
波誅戮之中依有風因一姓之軍發惡云云此
事於賴政法師者依顯赫之最科所波加刑
罰也從院宣之教尋皇紀者仍奉作下知件
諸國互承知依宣所教不可違失之故下

養和元年潤二月十日 左大史小槻宿禰

十日自鎮中將重衡權亮少將惟盛叔于流率兵
とわひくく東國へ發向と前後追討段之
於由よ名へてとて一可騎よかあり
大政入道とせ給くふふ十二日よとてありふとこ
そ由いんちと佛理とやうれとておとあり
官執よおしと給と事とてとてとてあり
初より十九日御後國城を所平資長少のふ

このありにれた余又將軍惟茂の後胤奥平
左衛門永家之孫城鬼九郎資國の子なりと
申すわろくふまのかりなれんうしのはり
まこととむらりもの又陸奥と奥郡と藤
原とをわろくふまのかりの武藏守あり
卿と兼葉陸奥推入文治法と陸奥推入藤
原とをわろくふまのかりの陸奥と奥郡と藤
原とをわろくふまのかりの陸奥と奥郡と藤
原とをわろくふまのかりの陸奥と奥郡と藤

よりの故二人は終く頼朝よりあをほい
まのきよとせんと申する大正三月廿
六日除目れ圖書とて二月廿二日外兼資
長富國守は但も治あり知おんのり
あはれ事と悦とてあをほいとてい
同は又日よ大あきとてわろくふまのかり
ろよ雲乃う人は名あて日本守一乃大あは
る義天皇ははる人あはれとてわろくふまのかり

きつる大政入るうれ者人止るものあり
りこれれを乃くする多たれんや
る母より城を解申風よあひる人
おまをそは危くもこ難う福ハおも
しうきおふもきつるもあま
をといおふも男子二人女子一人あり
よ一言れゆいんあとおふもあの日乃
乃母よりよさうりおそりまといふえり

あーあうとく才城治良賞讃れらる城田
長茂と改名も長乃福あよのせう
てお言をよあんとあひかり
初のきやていなる一つ
よりうらこのころ来あそ
ういくして無流流乃く
あな女身乃好をひか
あれんとそあはよといつ
あるにかよ

とて叙状申上り申上り
五條大かえん死去事女二日六条大なるん
邦保卿うせ給ぬ大政入つうと契方々さ
しわさうをもを録しありその上中御志
あつれ男あつれとつれはともよ甚源
ありあつれ二乃邦保迎傍院れ沙母進士報
あつれとつれなる母に平三年六月七日東
内裏焼亡ありつるのま上岡白れ年よの年

あるへまいせありしつりやを備司一人ま
いりともあつれとつれうれういなる人ともあつれ
あつれよ出法ありあつれともあつれつりつれあつれ
とつれせ給ぬるよあつれ邦保つとまいりつるうれは
大勝あつれよつれあつれあつれと勝興とつれ
とまいりつりあつれとまいりつれなりぬくつら
よまのつれつれいなるのありあつれ進士報は及東邦
保なりしつれつれえ下つれつれつれつれつれ

妙に入るとかきりしるまこと神と人なほし
心也はく人さうくむしあまはいととをあし
初らうれし神代の事なりとてかろんを
つらうまうくそかほえらるる海よとていゆ
きこふ名とてうりきり給深ありたれのとあら
もさうのめき乃いらくさううらくゆき
トらつれをたれたりありさうよあま
くはぬゆきとあしあくあるをせりみ人乃

せんそふ蔭れ申なうん中中く人わのまふさ
大哉とせりんせいへくさうれらるる道よを
れ繆のやうあく二歳よちりらるる子と海へ
かこし入るありうせよらるるれるゆ天を
さへつりらるるよ鶴ういらあをそそあらさ
じとさうらとよあゆるうとあなとあま
の飛とあまをたのひあましとてあらて
より侍れ飛じしれあんを思ひあま

乃其くうにきていそとけりむりむらありとそ
はく人きるむき諸部とそとあり帝とるそ
給くおとくせき法法思泰元子以寛年
法皇大井河よは幸わりむらあめ法もゆいこ
あは月御雲宮神とほり深もそとあて
そのうすおぬりむり中に和泉大お定國
いさこあ後上人よと法をもとつとるらる
嵐心のふたりとそありありあふおりーを

大井河よあさいとつれとせんこあて神と
そそりしそをあそとそとつと僧徳の家れ
そくろよりえほーをよりつとてあめ大およ
とこされよりあれとむら人屏目とあそあー
ありこれと海よとそとそとつとるらる
高倉あり又一乗あんの法徳寺と院法とい
高ハとそらわんれれ拍落よりあめ法あそい
のうーよりとるあにそとそとそとそとそ

及上人に也れあきつて福なりあきし
かろ増上りううみの中よりあしはるり
しうそとされあきしやこる人こは男
意もあきちへもしこりたれしよあよ
つとけ邦隈ハうもしこる人あきよ
かあきしとあきれきる衣うわのこあき
改入うよせりてのりうのあきよあき
日よあきしううう月よあきよあきわあき

れりあきるあきかきそんあき
た日あきしはあき及入あきあきあき
乃あきれあきあきあきあきあきあき
あきしあきしあきしあきしあきしあきし
あきしあきしあきしあきしあきしあきし
乃あきしあきしあきしあきしあきしあきし
あきしあきしあきしあきしあきしあきし
あきしあきしあきしあきしあきしあきし
あきしあきしあきしあきしあきしあきし

二月一日東大寺具後より僧侶本位に後
しる僧あまのこころに知りてかまふこと一室
下せしむる人ハ大會共におこるるべしと
後より恒例の三會をこころに十日念利會
十日目らんや云はば縁ありとて佛力ありと
かとおのひつるよしは絶れぬといふこと
おこるるれあること同出され十日念樂會
十日中ハあんなあんな中一會ありといふこと

さハ日本國の人多んまらうははらんあま
ハ具後より為ふこと同出され十日念樂會
んよ多んあまのこころに知りてかまふこと
鳥羽院に鳥羽殿といふことありとて
うけしことおのこころに知りてかまふこと
下よおのこころに知りてかまふこと
しおのこころに知りてかまふこと
うよわらうのこころに知りてかまふこと

乃きうくせりといふことせしむるやされ是凡
張國より箕田大明神れおのん物よけせ
給ふれハ河も浦よふまんとゆう申つのみ
忠しくて天煙とゆうくのこつやうとせしむ
くやあまんふのこ丁右流樂れとゆうもの
こまことふあま一別高階の良名なりと
して樂人の猿物なりと記せありと
かんぬるとてそわりせり

平漢河合戦事紀盛を漸進盛い下乃進討
乃仗えんぬる二月九日みのおまをい波河下
てうりうりおるう波氏乃大勝尾張國と
いふときこえん年表れ軍兵とせり
こ海れも乃鱗りりんととてらんをわい
まらせしうよと月と月れわけなのよ東乃
河原よ波志のあさしりてせなるすから
東の河もこは陣をよる乞ハ兵衛は細文

十郎花人の家と云ふは又千流んりりせ
まゝのこよひ共流法の才高羽の郷公田金と云
信ありと記はりしは子九郎一殿一燈のわよ
あり十郎花人よちうとせつあんとて共流法
多記のせいとはあゝうのゆりこりああり
十郎花人りちんよ二町かり屋を津を
とる年家ハにけれおとこよ七千余流法
ハ東乃河原よ二の余流法平河を屋とて

ちんよと云あくる卯越よ東あれ矣わとせと
まゝの流法と田金と云うひははれと云り
けりり同己勢ハりよまもみそあ乃衣り
おまゝの流法よけりる食法師一人流法の
陣屋よあゝ流法よみく物をあゝあゝ
まゝのこよひものよこそわんあゝとせいあゝ
わあゝりりりりゆい流法よあゝあゝりりれ
ハゝゝゝあゝりりせ流法わゝゝゝゝ一版

久しきにわたりてはなほうらやまの
こころをいかにかきとめておぼやかし
たしむるにやうかしくおぼやかしむるに
まじくおぼやかしむるにまじくおぼやかし
まじくおぼやかしむるにまじくおぼやかし
まじくおぼやかしむるにまじくおぼやかし
まじくおぼやかしむるにまじくおぼやかし
まじくおぼやかしむるにまじくおぼやかし

その乃りせむくちんせむよりのされハ
つらむとまじくおぼやかしむるにまじく
おぼやかしむるにまじくおぼやかしむる
にまじくおぼやかしむるにまじくおぼや
かしむるにまじくおぼやかしむるにまじ
くおぼやかしむるにまじくおぼやかし
むるにまじくおぼやかしむるにまじく
おぼやかしむるにまじくおぼやかしむる

まゝ何ぞおぼしはるはあのはうしあり
うなすは主馬判友威國う結誠申お司道
後う素子あふみ乃國石心は信房西は法金蓮
也名乃のく入より卿公は信のあけこみ
一定しとされあんと十郎殿人よとこなり
あうれくは音求法よおもてとわしとへん也
おとひりれは昭れ夫あをせさまりるあ
まのよきとあひは一人とあうし白雲殿

う一人よ乃あしちんり二可んりあ
りせよく鳥森とあふあをよかりとあうて
款ちんれまはうのけあをわう人方十郎
殿人のあれ昭れは身を流りて何とよこ
さしとこころり象全と目れ大おうんを
あしとあうんとあひてあやうし心おあ
くるとまらうあうり信のあれあしき
いしとあうとあうりて何とよをあく

甲子年十一月廿一日
人々もさういふに
この八款の法も
て國全がこうして
い御しゆくお
えそ名もさとい
く人々のあり
公衆全とのふ
へり入すまの
とさういふ
おせくお
十部
くあ
とみ
は
れ

へり入すまの
とさういふ
おせくお
十部
くあ
とみ
は
れ

榴葉河津をわゆるせきくわとせぬへき也
とて居いものあふくをけ入るる程は
程とわゆるよかりけれん平家飲れ大せい
とそ程うらよせうりと所りきりるつちをい
うて居きはつらよ二百騎んりたりを
得とそわりものどとて七千金騎とて
うとひいり十部能人大せいのみなり
わゆるはをうらとせとてつらよ大勝よ

そのいぢいものへいりつちのよのよの
一後よ二百と地はつらよ二とあふ
まて何とせか一とつちりきく二勝なり
騎ハ大ゆくんもんへりわらりけり
ひつちよよふつらつちよよあつちつちの
つちりるよよつらつちのつちをい
無きりるひつちよよつちよよつち
い乃水とつちつちつちつち大ゆくん

也ハみれども平家さうあくをハふりあり
尾張源氏衆を所せき先百騎乃被いして
三乃ふりありわくははむいふりあり
大それほ乃忠をこえて危いあれ大塚れ
中へを被入るりこまをさりのこあまきらん
少んハうこれく致ハ忠をさりきく大おらん
衆を所せきさうまよりすはれ人お丁のま
たのかうに小徳といふ所よりんまを致

へいげお七千と記れせいとあをさうい
志所まらされく忠をさりきく二重は上塚を
右邊一千と記れさうしひみふりこれ又
内うされく引ちりきく三ちんは八越中お母
と申さう千騎れ勝とてしひみふりこまを
いさうまうこれて忠をさりきく四ちんは八高
橋判官隆繩千騎れ勝とてしひみふりこれと
さうさう引ちりきく五ちんは八次中お重

後法東園乃大響ていま久りてよははは母
よいまあらぬつる海成かそのせいとしよはは
らんといひくつりりもりあんのとくはい
きてこれえとて思ふとくちかたは三ある東
園乃大響よとりこあられさおひかさん入
いまいるものも早りあつてもあひひよははあ
ち此園を七目よ始へわつたよよりの十部を
甲久を首へん波を舟く長徳屋法乃と名

中へいあとい矢といふらんもの海成は
あつとよをせしりなせえせんよあつとあ
秋若もといあよあひけくうあよあ
屋いあハ屋矢といふとてあつとて
あひりる十部を八軍よあひけてえせん
秋水澤と後よせ白事あつたといふ
何とてうらあよとたわう事といふ
事あつたといふせんれえあつとて

をりとし中あひあひ

十部院人伊勢造於十部院人三河國府
より伊勢大神文へ願書とて奉るる願書
よ云伊勢野度舍乃伊鈴乃河上乃下津磐
根仁大文極廣敷立_て高天原于木高知_天
奉補申定天照皇大神乃廣前_下張申_後定
中上六位上深胡良乃家去治承三年之比
家_深親王勅云大相國入道貞去平治元

年以來深不當之高位令隨百寮万民之間
去安元元年終不家勅定正二位權大納言
藤原成親因子息成經為_遠流_天補_因意
之_軍院_中迎_習上下諸人_長校_令敬_害身_或
死_流遠_迎每_指事_智之_為大_相國_入道_以下
四_十四_人受_罪科_或今_上至_主奪_位讓_于謀
臣_之孫_或本_新天_皇入_構已_留於_理政_又為
一_院第_二皇_子尚_國之_黑因_口自_又月_十五

日夜俄可被配流之中風國天園城寺退入
之變以充少帝乃隆恐禍漏宜放天台山副
於與力或仰護國之司集軍兵已絕於皇法
擬滅佛法之變早尋天武天皇之舊儀討王
位得取之奉勅上官大子之右孫已佛法破
滅之類如元國之改奉任一院令諸寺之
法繁昌無諸社神事遂例以正法依國謬為民
慎天念許爰乃表先跡者首天國捍國經御守

清和天皇王子具能親王七代孫自六孫王
下津方勵武弓護朝家高祖父賴信朝臣攝
忠常蒙召次之賞曾祖父賴義朝臣康平六
年鎮具列之董後代為親橫祖父義家朝臣
寬平年中雖不經上奏為國家不忠討武平
家平為威振于東夷衣上于西流親父為義
祭良大衆之發向討止鎮護王法無實位誓
太上天王之誓夷城善照四海幸肉懸百司

心中王事靡盬而去乎治元年汝氏被止忠
仁後入道倫以武威郡城內身官奉涇陽之
外教誅道然則汝家訪先代天照大神初日
本國若戶飛天新豐葦原水穗盪觸之汝彼天
降後屋舛天承約家三十九代祖宗也御垂迹以
來能護國家之誓嚴室天冥威无隱之变入道
不思神惠企道亂是所被愚意也遙拜高座
不致胡恩也又汝家親父胡片如大相因誇

私戚兆于起謀叛依上皇之御白河沙所許
也攝謀叛之執依江胡夜相傳而從塞於屏
同天不隨順普代之不傾者彼止知以之衣
糧獨身不宵汝家彼入道可一不不及也然
入道忽依起謀叛天汝家為防胡款亦下
向天於胡如片相去且諺於源家子孫且羅相
傳之不從不企於上洛也如素任意東海東
山德因已令國忘身是胡威之貴不致且所

令神明之於帝王守護之禁而令感焉也隨
又如風雨若自大神之放鑄入道其身已沒
見之國之上下萬人況宮中臣等何人而思
亦盡感誰人而作於源家柁東海法因之神
宮御領事依先例命神役可令備進之青雖
如先下詔或怒平家不可下役若成人令下
役者有奉納備進之所不令則心於神領僅
兵振米糧斗也早可令停心又始自院宮就

家臣下之領為國之存亡之年真國如之事
全不謀也救多軍兵或云源家或云右大臣集
思之之間不無介難泐久轉中必欲村治注
人百姓亦之熱歎因罪則必有其去類仍家
同哀歎不少隆功極良之意後遂救月爰仍家
改系五王城奉懷亦書於朝者后東列之
志博耀為治之明威也神明必靈神於早鎮
亦天下治服云平家之先才貴肉於護國家

之軍速絶也神皇法又云源氏之子孫累葉
度有二意者必令冥爵法皇大神以状平安
步石^天之為會事令遂於上流速成法護出家
之勸官法天皇胡遊之冥位無勅源氏大小
從款無意夜守盡護奉法思^く申法^へと申

治承五年正月十九日 正六位上源朝臣行家

とそむさうりむる四月廿日兵衛依於胡と
う法へさう^く為法^へわらう人依行^くを所^へ高

養うもそ人かんれちわう乃出下又とそ
これそのう人ハ高う^くうち^く依行^くを所^へ高
よ孫ん危^く頼^く船^くとあ^くよ^くし^くう^くを^くせ^くる^くあ^くい
う^くこ^く依^くる^くと^くあ^くい^くう^くる^くん^くと^くそ^くあ^くう^くと
ん^くと^く危^くい^くあ^くか^くれ^く國^くの^くち^くよ^くう^くと^くを^く
て^く中^く江^くと^く中^く江^くよ^くと^く高^く家^く頼^く船^くと^く名^く教^くを
い^くう^くと^くと^くれ^くと^く物^くれ^くま^くの^くう^くら^くく^くよ^くら^く
ら^くう^くこれ^くく^くう^くら^くう^く奥^く列^くへ^くあ^くけ^くこ^くの^くあり

あ、身山松肉大長被薨ぬと年又入つ
相國もうせ程もぬあめうたに在いあうんつ
さむる事わうとれうりさう道は年未れ息
こふともうらのほつ六後付あめううまう
うら後よまの流木七道ののれらん流木流木
乃んあつともう事よて去長れ美早さひい
あつを程をれ大風流木うらつさう
りうよ東作のせうとさうせとさうゆとさう

ぬれりともあさうりあうりかりぬれ天下大
小飢饉とく多餓死よあふうさうさう
くれよあり明をいあつとさうあつとさう
やとありひいほとふあつとさう又夜腐と今
らさへく餓死病死乃あつとさうあつと
ん破乃ともさう事よりさう海とる
んともさうとわつとさうあつとさう
らあつとさうとさうとさうとさうとさう

あつゆとすれんやとてまゝのちりあ
木のむもついついちるもさ大海沖のねえも
いつと死人のまこころをいふもつらんとい
現るうとてされとるまなもとまへま
より次死人乃う人ともやうなり死者覺有次香
きうまんしてめうふんまへもつらんとい
秋まふ人のまきこころのちりあはらうい
ちりあちりあしてつらん乃うあまうりあ
甲そのあふる尾屋集やまのほまへつらん
木のちりあはらうまへまこころのちりあはらう
とまやあまの佛像あまのちりあはらう
あやゆとんれ世れ増れせとらんちりあはらう
くらをちりあはらう

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written on aged, yellowed paper and is oriented vertically on the right page of an open book. The script is dense and difficult to decipher, but appears to be a form of early modern European cursive. The text is arranged in several lines, with some words appearing to be separated by small gaps or punctuation. The overall appearance is that of a well-preserved but aged historical record.



